

木澤成肅
編纂

小學
初等
修身幼訓

卷五

館	書	育	教	本	大
室	二	第			
	二				
	七				
	九				
	四				
	號				
九					
冊					

函架號

東附

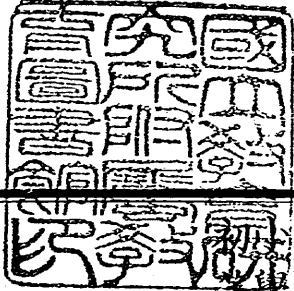
K110.1
47
5

木澤成肅編纂
蒲生重章校閱

卷五

小學
初等
修身多訓

明治十五年三月廿八日版權免許

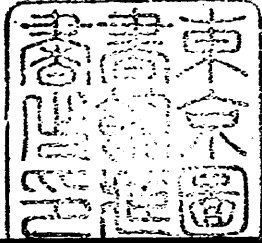


修身幼訓卷の五

第十三

木澤成肅編纂
蒲生重章校閱

○君子ハ其能ざる所の者故以て人を病ま
志免び人比能せざる所此者を以て人故愧
ぢしめず君子の接りは水比如し小人の接
り醜の如し君子ハ淡ふして以て成り小
人は甘ふして以て壞る禮記



小學初等

修身幼訓卷五

○親族隣里ハ、居處甚近、凡養畜の侵害を
る、僮僕の争競を、言語行事の錯誤する、勢
免る、六也能む、但己よ反省し、人を責む
敷ことあまきば、能く交を久しくを過し、若
し遽り小嗔怒成生じ、彼此俱に相下らば、若
やたし、仇怨終了する時あり習是編
○尊圓法親王賢曰、人と生きて一の能なき
を此に、畜類小はをせし、畜類もを此に、成乃
きがなすわざあり、草木な成功能多し、人と

志て能あまきと、天是をえて、なたが如くは、
心有らんとの、むづかき事ならずや倭論語
○長者よ謀る、必、几杖成操て、以て之よ従ふ、
長者問ふ、辭讓せしめて、對するハ、禮小非る
也、年長ずる以て倍すまば、之よ父と事ふ、
十年以て長まきまば、之よ兄と事ふ、五年以
て長まきまば、之よ肩隨禮記

○人福あれど富貴至ふ、富貴至まじ衣食美
なり、衣食美なきハ、驕心生じ、驕心生まじハ、

行邪僻ふして動て理を棄つ、行邪僻なれど身死失ひ、動て理を棄きば、成功なし、夫内死夭の難ありて、外成功此名ふた者ハ大なる禍あり韓非子

○我が過を改むる者ハ、未必ど一も皆過ふたの人ならん、苟くも過なき人、我が攻むるを求め、終身過を聞くべし、我當さみ其の我を攻むるの益、感さぬたのこ、彼が過あると、過なきと、何ぞ計る小暇あら

んや呻吟語

○人成るハ、始め善ふ與みなき在り、始善ふ與すれど、善善を進む、不善由りて至ふと、善ふ始め不善ふ與みなきば、不善不善を進む、善由て至ふと、草木の産此如た也、各其物を以て孔子家語

○程伊川曰く、近世人情淺薄、相歡狎を以て、相歡愛を以て爲す、此の如き者、安んぞ能く久しか

らん、若くは久志たを要せむ、須らく是恭敬な
ふべし、君臣朋友皆當さふ是、以て主と爲
ま、古學彙纂

○君子の能も亦好く、不能も亦好し、小人も
能も亦醜く、不能も亦醜し、君子能すまば、寬
容易直以て人、以て能せざれば、恭敬縛
紕以て人、以て畏事を、小人の能すまむ、倨傲僻
違以て人、以て驕溢を、能をばれば、妬嫉怨誹以
て人を傾覆に、荀子

○大江維時卿曰、凡、善人、他人の心ば、以て感
ず、善行、以て聞て、親疎なく、うけよる、善、惡
人も人の貧を見て、いあふ、福貴なるを
みて、字らやみ、倭論語

○善、以て人、以て先人を教と、言ふ、
善を以て人、以て和する者、之、以て順と、言ふ、不善
を以て人、以て先人を教と、言ふ、
善を以て人、以て和する者、之、以て諂と、言ふ、不善
を以て人、以て和する者、之、以て諛と、言ふ、是を是
と、非を非と、を、知、言ふ、非、是と

一是を非とをる之、我愚と言ふ 荀子

○家の親小聴き、國の君小聴く、古今此公行也、子の親み反かば、臣の主に逆はば、先王の通誼也、子道の順ふして拂らば、臣行を譲りて争はば、子よして私道我用る者の家必亂スき、臣みして私義を用る者は、國必危ス一 戰國策

○管子曰く、恵の主此高行あり、慈の父母の高行なり、忠の臣の高行なり、孝の子婦此高行あり、主恵よして懈たらざまば、民奉養を

父母慈ふして懈たらざまば、子婦順あり、臣忠よして懈たらざれど、爵祿至る、子婦孝みよして懈たらざれば、美名附く

○我を教ふ人何らぞ、我その人より猶愈々々たる敬ふを、いふ敬へばやて、位上此氣色をあらはし、驕慢此心を休志をさむ事、誠よ何さましく口惜き事あり、たゞひ人へさぶ志免れやしむるとも、我道我信し禮成ふかくせむ、信徳はるよ何らはきて、人う

やほひ茂なすべたなり 最明寺時頼教訓之文

○伊藤仁齋曰く、耳目茂駭かさび、世俗は怩らど、從容和易善を樂て倦まじ、學問の道斯く此如きのみ、若し夫の好て高論奇行茂爲して、人倫は益なく、日用は資けをた者も、皆與み堯舜此道に入る處からば 仁齋日札

○夫は禮の自ら卑志をして人を尊ぶ、負販の者といへば、必尊ぶとあれ也、而る茂況んや富貴に於てをや、富貴にして禮を好む

をたまむ驕らば、貧賤にして禮茂好むを知らば、志懾ふからば 禮記

○凡、外に於て及び歸る、長上の前より於て揖をさせ、暫く出るや、雖亦然り、凡、門茂開た簾茂掲ふ、須く徐々手を輕くし、震驚聲響せしむ處からば、凡、衆坐必身を斂め、廣く坐席茂占ふ勿き、凡、酒茂飲む、醉み至ら志む處からば 童蒙須知

○高階重經卿曰、をろく此藝能は、その人小

もよらば、氣根のなたみもとらず、たゞ心ざ
しのみきなる、よからぬ人、生はたしと氣根
此不足と、残いひて、をのきぐ心ばし、乃ちま
事をいはど倭論語

第十四

○自ら暴ふ者は、與ふ言ふと有る處からざ
る也、自棄る者、與ふ爲と有るべし、
之也、言禮義を非し、之残自ら暴ふと謂ふ、
吾が身仁ふ居り、義よ由ると能はざる、之残

自ら棄るといふ也孟子

○鸚鵡能くこの言へども、飛鳥残離きば、猩
々能くも此言へども、禽獸を離きど、今人
して禮なれども、能くもの言ふといへども、
亦禽獸の心ならんや、人禮あれば安く、禮な
れども危し、故よ曰、禮を學ぶざる處からざ
る也禮記

○先王の禮を立るや、本あり文あり、忠信の
禮の本也、義理も禮此文也、本無れども立し、

文なまきバ行はれバ、禮ハ猶體ノ如也、體備らざれバ、君子之を不成人と言ふ之、戔設けて當らざれバ、猶備らばるガ如き也禮記

○事ヲ孰れをか大ナリトオス、親ノ事ヲ在大ナリト為シ、守ル孰れをか大ナリト為シ、身ヲ守孰れを大ナリト為シ、孰きを事オト為キ、然ル身ヲ守ルハ守ル本也孟子

○後事を慮らざれ人ト、奉養ノ奢リ、酒食戔豐ホ、家宅戔美ホ、衣服戔飾リテ、費を惜

ほシ、財盡れば、人ノ借ホ出シを憂ヘバ、財を貸シ人あまシ、飽マデ借ル、借キル財ハ利息加コリ、彌借リテ彌不足、遂ニ家を破ホト至ル、故ニ初ヨリ早く慮リテ、後ノ計戔為シ

畫一 家道訓

○事ハ慮ルに生シ、務ルニ成リ、傲ルに失シ、能ク諸レ戔人ホ求ホなく、而シテ之戔己に得ん乎、之戔思ひ之を思フ、又重祿之を思フ、之戔思フテ通セざれば、鬼神將ニ之

戎通ぜんとい、鬼神の力は非る也、精氣の極な里管子

○藤家隆朝臣曰、心不偏六やなくして、さかふるものなし、ゆへは善人の第一は、誠心戎求て、外をのづから得るに比なきを、ろあ躬教も此も、外戎求て誠心戎もや免じ、このゆへは、倭論語

○甘は和を受け、白も采戎受く、忠信の人へ、以て禮戎學ぶ處し、苟も忠信おたの人と、禮

虚しく行はきば、是を以て其人戎得るを、こ

き貴しとい、親を親み、尊戎尊ひ、長戎長とし、

男女の別あふら、人道の大なる者也禮記

○骨肉此歡を失ふ、至微は本はき、終ひは解く、蓋歡を失ふの後

各自うと氣を負ひ、肯て先づ氣戎下はは

れ、由る朝夕群居相失ふの後、一人能く先

の氣戎下だし、之れと話言をるあれば、彼此

應酬遂は平時の如し表氏世範

○徳ハ福の基也徳なくして福隆りなるハ猶基なくして墉茂厚くするが如し其壞るや日あし徳純あらばして福祿並び至る之を幸と言ふ夫き幸ハ福ヨ非ビ徳ヨ非レバ當らバ雖々たれむ幸となさ孔子家語

○藤頼親卿曰く賢き人々も此よおふハれぞたろかあるそのも物よ志ヨグひ常ヨ心さたまらざれふと里善ヨあへむ善みうつる惡ヨ阿へむ惡み字はふと能あり倭論語

○争氣ある者ハ與に辨ずる勿き故小必其道至るよ由て然る後之よ接を其道非レバ之を避く故ヨ禮恭志くして後與ヨ道の方成言盈し辭順ふして後與に道此理を言ふべし色從て後與ヨ道能致を言ふべし

○夫き仁ハ天の尊爵也人此安宅也之荀子を禦ぐ者莫くして不仁なるハ是れ不智なり不仁不智無禮無義々人の役なる人の役よして役となる成恥ふし猶ほ弓人ふして弓を

爲子我恥ぢ、矢人よしく、矢我爲子を恥るぐ如し孟子

○君子の人よ異なる子所以此者の、其心我存を我を以て也、君子の仁我以て心を存し、禮我以て心を存し、仁者の人を愛し、禮ある者人を敬し、人我愛する者の、人恆よ之を愛し、人我敬する者の、人恆よ之を敬し孟子

○藤實冬卿曰、とろくの藝をたへどはせぬぬきば、かあらば身を多つ、徳我はと免おふ

あへど、かあらば賢人となふ、然ればなんぞ

人となる此道我はせぬ、いたらざるや倭論語

○聖賢の事を以て、企及ぶをうらずとし、其良心我捨て、自暴自棄我甘んじ、勉免ざるを、志を立る卑下と言ふ、群聚嬉戲する勿れ、獨居安肆を勿き、無益此書我觀ふ勿き、朋友同處して、當よ久敬此道、通財の義を知るべ

高提學洞學戒

○人多く子弟の輕俊を以て、喜ぶ一と爲し

て、其憂ふべたを知らば、輕俊の質ある者ハ、
必^テ教^ル小學ヲ以テ、本^ニ近^クづか^リて、
文辭^ノ末^ニ習^ヒて以テ、せ^バま^バ、其^ノ偏^ニ質^ヲを矯^メて、
其^ノ德^性ニ復^スル所以^也 諸儒小學論

○交友宴會の間、人品齊^一からば、或^シ躬行
玷^ルあり、或^ハ相貌全^クからず、或^ハ今尊顯^ト
雖^ゾも、出身^モと微^也、言語の間、須^ラく心^ヲ
留^メて點檢^スを怠^ル、切^ニ忌諱^ヲを犯^シ、人^ヲを志^ス
て愧恨^セしむる^ハと勿^キ、唯^ニ厚道^ヲ失^フの

みならび、亦且、怨^ハ人^ニ結^バん 願體集

○凡^ソ人^ノ人^ニする所以^ハ禮義也、禮義の始^ハ、
容體^ヲ正^シ、顔色^ヲを齊^ヘ、辭令^ヲを順^ニよ^クお^シ、
在^リ、容體正^シく、顔色齊^ヒ、辭令順^カく、
禮義備^フ、以テ君臣^ヲを正^シ、父子^ヲ親^ム、
長幼^ヲ和^ス、君臣正^シく、父子親^ム、長幼和^ス、
て、后禮義立^ツ 禮記

○道^ニ入^リ、此門^ニ是^レ自^レ身^ヲを將^テ、那^ノ道理中^ニ
入^リ去^ル、漸^ク々相親^ミ、己^ト一^ヲ爲^ス、而^シて

今人道這此裏あり自家外み何ぞ元來相
干からば學者書讀み聖賢の言語を將て
之を身小體をべし朱子讀書法

○宋の范文正曰く、吾毎夜寢よ就けべ、即ち
自から一日食飲奉養の費及び爲を所の事
を計り果して自から奉ざる此費と爲を所
の事と相稱へば熟寐を或は然らざれども終
夕安眠をるべき能はず明日必ぞ之を稱ふ
所以此者を求む自警編

第十五

○人小たち交り多よし人事をきよりゆさ
れ人残む親とれをひりかたをば弟とれも
ひおさまき残む子とれをひてか里を免に
も何ら整ひ多し事かきこれほとが
残れかをばして人のやがをゆれしはゆさ
ば君もおれはうら御あこれみ残れき多し
ひ人もかふらば敬れあしるれこそを
○吾形へ人吾性へ天天残これ祇敬せざし
最明寺時頼教訓ノ文

て人よ去き隨ふ人小徇ひて反不_レ忘_レ其
天_レ棄_レて禽獸小淪没せざれもの幾人と希
ふ_レ道_レ得_レて喜べば其喜_レび曷ぞ已まん欲
を得_レて喜べむ悲_レ立_レて俟つ_レ惟道_レをこ
ま_レ務め欲_レ去_レれ去_レき方正學幼儀雜箴

○凡_レ家長と爲りてハ必_レ謹んで禮法を守り
以て群子弟及び家衆_レ御_レ之_レ分つ_レ職
を以て_レ之_レ授くる小事_レ以て_レ其成
功_レ責め財用の節を制し入_レを量_レりて出

そ_レ去_レを爲し家の有無_レ稱ひて以て上下
の衣食及_レ吉凶_レ此費を給_レ皆品節ありて均
一_レあらざる_レ去_レとなく冗費_レ裁省し奢華を
禁止し常_レ稍_レ贏餘を存し以て不虞_レ備_レふ
○司馬溫公居家雜儀

○己の爲_レを_レ此學_レ知ら_レ好_レて大言_レ
なし互_レ相_レ標榜し容貌を粉飾し専ら虚名
を_レ心_レ存_レぞ欺_レ妄_レといふ師
を見て敬せば退_レて_レ之_レを詆毀し朋友善を

責るも從ては、過は規をれば怒る、之を師友を陵忽をといふ 高提學洞學戒

○徳餘りあれ者ハ、其藝必精、藝ハ徳ノ本ばく、爲を去やなくして名あり、惟藝は去き務き、徳則至らば、苟も其精を極む、世之を貴むは、汝が書は美ならざるハ、自視て善からずとき、徳人ノ若かざるも、憂るは知らば、其大は先よし、其細は後にす、大傳ふるなきハ、人之を棄てば 方正學幼儀雜箴

○二書を以て之は言へば、一書は通じて後一書小及ぶ、一書を以て之を言へば、篇章句字、首尾次第、亦各序ありて亂る處からず、力の至る所は量りて、謹て之は守り、字其訓は求め、句其旨を索免、未だ前を得ずば、敢て後を求めば、未だ小通せずば、敢て彼は志はば、是の如せば、疎易は陵躡の患なからん 朱子讀書法
○夏月父母小侍をれば、常は須く扇は其側み揮ひ、以て炎暑は清うし、及び蠅蚊は驅逐

を蓋し、冬月の衣被の厚薄、鑪火の多寡を審察し、時々増益を爲し、并小牕戸に罅隙を候視し、風寒を侵す所と爲らざらざら一先務めて父母の安樂を期して方よし已む 屠提學童子禮
○古人此法、之を學ぶと篤く、之を養ふと深し、故に其之を出はたさず、近日人捷得を務む、聰明なる者、摘段數葉を讀めば、便ち青紫を拾ふべし、胸中何ぞ嘗て一毫の道理知覺あらむ、乃其君を致し、民を澤をるを責

むと欲を難かな、故に必先子弟をして書讀み、實を務めしむ 陸稼亭小學論

○十歳以上、晨を侵して父母に先ちて起き、梳洗し畢ば、父母の榻前に至り、夜來の安否を問ふ、如し父母已不起れば、房に就て先揖を作し、後問を致し、問畢り、仍て一揖して退く、昏時父母將に寝んとするを候き、と、席を拂ひ、衾を整へ以て待つ、已に寝れば、帳を下し、戸を閉て後息す 屠提學童子禮

○凡視聽須く精神を收斂せしめ、常小耳目をして專一ならしめ、目書は看るとたゞ、一意書に在り、側他所を視る處からば、耳父母の訓誡を聽た、先生や講論するるときも、一意に承受し、他の言は雜聽せべからず、其書を見、講義聽せたり非ると、亦當に凝視收聽せしめ、此心をして外馳せしむる勿き、屠提學童子禮

○身を端しく志して正坐し、書籍筆硯等の物、皆頓放常あらしむ、其當に讀む所の書、當に

用う處に此物時、隨ひ從容取出し、手小信せて翻亂するを得ば、讀用已し畢り、復し原所小置き、參錯せしむる勿き、其人の書物を借ふ、當に簿に置き登記し、時小及て取還し、遺失を致さず、屠提學童子禮

○古の人能食ひ能言ふよりして、之は教ふ是故小大學に法、豫は以て先とち、人此幼や、知愚未主とる所あらば、當に格言至論を以て、日々に前小陳し、耳に盈て腹に充て、

久々志を自ら安習し、之を固有せる者に如くを過し、若し豫めせば、稍長ずるに及て、意慮偏好内より生じ、衆口辨言外より鑠き、其純全を欲するも、得過うらざれ而已。諸儒小學論

○凡童子、常に當に口を緘し、静黙をべし、輕忽言を出さず、或は言ふ所あらむ、必須、聲氣低平よそべし、喧聒を致し得ば、言ふ所此事、須く眞實にして據る所あるべし、虚誑を得ず、亦尤傲し、人を訾り、及び人物に

長短を輕議し、子を得ば、市井鄙俚、戲謔無益此談、尤宜く禁絶を過し。屠提學弟子禮

○子を教ふも、正を以てするより貴たへまし、愛して教ざるは、之を愛すと謂を得ば、教るに正を以てせざる者、豈之を教ふと謂ふを得んや、何を以て之を言ふ、人家の興替をる所以、禮義の有無、子孫に賢否何如、在る耳、子孫賢し、禮義明ならむ、父慈子孝、兄弟友弟、恭夫義婦、聽にして、和氣堂に満つ、何の富

貴か之小如人 諸儒小學論

○危犯小臨みて懼れど、義み當りて其身を愛せば、是君子變り處るの道也、是の時に當りて、宜しく勇猛果敢ふべし、若し恐怖しく苟も免まきべ、平日に小廉曲謹ありと雖ぞも、觀みふよ足らざれなり、大節に臨みて奪ふ處からざらば、君子に人と為さべきなり 慎思錄
○世人怒りよ於て暴と遽とに傷る齒切し、袂を攘げ、厥慮我審る小せば、聖賢へ然ら

び、道を以て度と為し、道に揆り物に酬ふ己と與かれば、暴遽は去き懲らし、聖賢は去き師とせば、顔子に學を好むも、此れよ聖と推は物好む處たあれも、之は好むかま、徳好むべき所らど之小效へ、物を賤み徳は貴ぶば、道遠からば、允に之を踏む得べし 方正學幼儀雜箴
○灑掃應對進退、此真る弟子の事なり、世俗侈靡小習てより、一切僕隸以て之小當り、此理講せざる久し、貧士の家猶或へ之あり、

灑掃亦至り、貧士此家も亦絶て之を去り、友人姚文初此家、其門庭蕭然、一切此灑掃應對進退、皆今の次公役を執る、文初ハ現聞先生此後也、貧士た子者、以て媿づ陸桴亭小學論

○天の將小大任我、是人よ降さんとて、子や必^ス先づ其心志を苦^シめ、其筋骨^ヲ勞^シ、其體膚を餓^ヤし、其身^ヲ空乏^ニし、行^キ其爲^ヲ所^ニみ拂亂^セれり、心を動か^カし、性を忍^ビ、其能^クせば、子所^ヲを增益^セる所以^ニあり、人恒^ニ過^リつて

後亦能く改^メ、心亦困^リみ、慮亦衡^ラむりて、後に作^リ、色亦微^シ聲亦發^シて、後亦喻^ル孟子

○宋の范質詩を作^リて、其從^テ子果^シ、曉^シて曰く、物盛^カれば必^ズ衰^ヘ、隆^キあまば還^ル替^リあり、速^ニ成^ルまむ堅^ク牢^ナならず、亟^ニ走^ルれば多^ク顛^ル躓^ルを、灼^ク々^トる園中の花、早^ク發^ルむ還^ルつて先^ニ萎^ム、遲^ク々^トる澗畔^ニ此松、鬱^々として晚翠^茂、含^メ免^ル、賦^命疾^徐あり、青雲^力めて致^シ難^シ、語^ヲ寄^セて諸郎^ニ謝^ヒ、躁^進ハ徒^ニ爲^ル

小學修身
初等修身幼訓卷の五終
み 小學外篇

初等修身幼訓卷の五終

明治十五年三月廿八日版權免許
同 十五年五月 出版

定價八錢

編纂人

東京府士族
木澤成肅

出版人

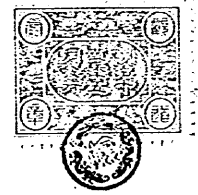
同 士族
辻謙之介

出版人

同 平民
阪上半七

發兌人

同 平民
北畠茂兵衛



同區通壹丁目

